

友だちを意識して行動する子

A組担任 白水幸子

1. 対象児のプロフィール
生徒名 T・O (男)
本校小学部より入学

昭和50年9月5日生 (中学部1年)
自閉症

(1) 遠城寺式乳幼児発達検査

項目	移動運動	手の運動	基本的習慣	対人関係	発語	言語理解
発達年齢	3:0	1:4	2:3	0:5	0:4	1:2

(2) 一般的特徴

- ◎衣服の着脱は指示によりしようとするが介助が必要である。尿意を感じても一人で便所に行かず、指示が必要である。
- ◎十分に粗糲しないために満腹感がなく、かなりの量を食べる。異物をよく口に入れる。
- ◎他生徒の指示や呼びかけに反応を示すが、自分から働きかけることはない。休憩時など、一人で本をめくって遊んでいることが多い。
- ◎さかんに無意味語を口にしている。欲求が通らない時や不快な時は「いけん」と言って、口をたたいたり手指や手首をかむ。始終指で舌をつついていっている。
- ◎学校生活全般に指示や介助を必要とする。

2. 問題点及び取り上げた理由

学校生活全般に指示が必要であり、移動を中心とした指示は大体通る。しかし、本児から働きかけることは殆どなく、快、不快の表出があるだけである。そこで、生活リズムの確立に基盤を置き、本児の諸感覚を刺激することでもっと教師や友だちを意識した生活、行動が期待できないものかと考えたのである。

3. 取り組みの構想

- (1) 本児の生活リズムを確立させ、その軌道を歩ませる。
- (2) 毎日の生活の中で、友だちと一緒に手押し車、トランポリン等で運動感覚を鍛える。
- (3) 乾布摩擦や髪の毛のブラッシング等で皮膚感覚を鍛える。
- (4) 教師からの細かな指示はできる限り少なくして、本児からの要求や発言を待つようにする。
- (5) 一方、生徒たちからの声かけ等を多くさせる。

4. 取り組みの経過

(1) 生活リズムに関わる指導

本児は昼食1時間前ぐらいが最も機嫌の悪いことが多く、指示も通らない。自傷行為に結びつくことも多く、学習過程はもちろん生活リズムの面からも考えていくことにした。特に、就寝・起床時間、排便の有無、朝食の有無をポイントに生活ノートを通して家庭と連絡を取りあい、生活リズムの確立をめざした。

学部の取り組みとして次のような内容が生活ノートに組み込まれ本児の家庭での様子がわかるようになってきた。就寝時間はまだ日によって異なるものの起床時間は7時前後に定まってきている。

※生活ノートから

家庭生活で		評価
1	就寝	10:30
2	起床	7:00
3	朝食	11:00 △
4	排便(便通)	なし
5	洗顔、はみがき	×
6	手洗い(食事前)	○
7	手洗い	
8		

(2月22日)

家庭生活で		評価
1	就寝	10:40
2	起床	7:00
3	朝食	△
4	排便(便通)	なし
5	洗顔、はみがき	○
6	手洗い(食事前)	○
7	手洗い	×
8		

(2月23日)

朝食をとってきていない日はやはり全般に不機嫌であり、給食後も続くことがある。家庭の協力が得られ食事量調査を行ったが、かなりの量を朝からとっていることがわかった。粗癪せず、なかなか満腹感が得られずに「もっと」と器を出して要求する本児に応じ、更に量を増やしていたが、少しでも長く時間をかけて食べさせることで量を一定に保つように変えてきた。当初、牛乳に口をつけなかった本児が少量ではあるが自分から牛乳に手を出して飲むようになってきている。

本児は尿意を感じても指示されないと便所に行かず、下着を汚すこともある。そこで、時間を決めて指示を与えるようにし、毎日のリズムの中に組み込んでいるが、指示されると尿意がなくなるとも便器の前に立っていることもある。2月に入り「オシッコ」ということばをはっきり口にしたことがあり、その都度便所に行かせことばに行為を結びつけ定着させようとし

たが、「オシッコ」ということばはきかれなくなった。尿意による不快がまだ十分にはよみとれていない状態であるが、継続して指導を行いサインを見つけていきたい。

生活リズムを確立させるために、毎日の繰り返しの中で本児の生活に軌道を敷き歩ませるようにしている。朝の活動もその中のひとつであるが、朝の活動では指示がなくとも予測をもって取り組むことができるようになってきた。(朝の会の進行は生徒が交替で行っている。)

朝の活動	本児の反応
1. あいさつ	朝の会が始まれば起立することができるようになってきた。あいさつをされるとあいさつの動作をかえす。
2. 今日の日づけ	反応はない。語りかけると頭を下げる。
3. 健康調べ	名前を呼ばれると手をあげて応える。
4. 歌 「どこでしょう」	自分の名前が呼ばれると歌にあわせて手をうごかす。歌にあわせて手をたたくこともある。
5. 日記の発表	指名されると生活ノートをもって前に出て教員に生活ノートを出す。教員による日記の紹介が終わると生活ノートをもっと自分の席にかえり着席する。
6. 先生の話	反応はなく着席している。

朝の会が終わると指示をうけて便所に行く、排尿後は指示がなくても体力づくりのために体育館に行っていることが多くなった。

(2) 感覚を鍛える指導

① 粗大運動を通しての指導

体力づくりの時間に友達と手押し車・肩を組んでの揺りかご等取り組んでいるが動作模倣ができず、かなり指示や介助が必要である

本児はトランポリンが大好きなので、トランポリンを通して刺激を与えたり他との関わりを持つようにさせてきた。一人で跳びたがるが、常に誰かと身体接触をもって跳ばしている。また、一緒に跳ぶ時には跳びながら背中をさすったり腹をついたり、本児の身体に刺激を与えるようにしている。

友だちがトランポリンで跳んでいるのを見ると近づいて立っていることが多くなり、招かれるとトランポリンにあがり相手を意識して自分から手を出すようになってきた。

②乾布摩擦による指導

「皮膚感覚が鈍い」という運動養訓の指摘を受け、昼休憩時に乾布摩擦を行った。当初は嫌がっていたが、徐々に慣れてきて乾布摩擦をうけるようになった。最近ではタオルを渡すところすれないものの、タオルで胸をさするようになってきた。家庭の協力を得て家庭でも乾布摩擦をさせているがまだまだ皮膚感覚は鈍く、先の細い棒で背すじをなぞっても反応がない

③教科・生活単元学習を適しての指導

指で舌や歯をつつく常同行動を軽減させるために、握る・つかむ・ちぎる・ぬる…といった学習を多くして、手指の感覚を拡げることがをねらったが、手を大きく開くことはせず、第一指・第二指・第三指の三本を使うことが多い。舌や歯へのこだわりは続いている。

(3) 友だちとの関わり

本児が中学部の日課に慣れるよう常に一緒に行動し、働きかけを多くしてきた。ズックの着脱、排尿後の手洗い等、指示による行為が多い。しかし、行為の前に教師の表情を伺うこともあり、その場合には認めて促すようにしてきた。

二学期に入って、教師の細かい指示を嫌うようになったので、教員による直接の指示は控えるようにし、友だちによる指示を多くした。友だちの指示に対する反応は比較的よい。

他クラスの自閉症の生徒が、友だちをたたいたり、つねったりした場合に限り、その後その自閉症の生徒に対し、本児が「たたく」という行動に出ることが見られるようになってきた。また、友だちの誰かが教師に叱られていると近づいて来て止めようとするようになった。

5. 考察と反省

本児の、友だちを含む外界に対する働きかけを高めるためには、生活リズムの確立を基盤に置き、更にその上に諸感覚を鍛え、遊びを広げることが有効であると考えて取り組んできた。本児の生活リズムを確立させるために家庭の協力を得て、睡眠、排便、食事と生体のリズムをつくり、そして学校生活に軌道を敷くことを重点に指導を行ってきた。少しずつではあるが予測をもって本児が取り組む場面も出てきた。しかし、まだまだかなりの指示や援助が必要である。

また、感覚を鍛えることで具体的に効果が現れるには、長い時間をかけての継続指導を要する。

年度当初と比べ、友だちの行動や動揺に対して自分から働きかけようとする場面も見られるようにはなったが、友だちの中で意識をもって行動するには時間がかかると思う。

6. 今後の課題

今後も本研究の手だてを、時間をかけて継続していきたいと考えるが、特に感覚を鍛える取り組みに力を入れたい。更に、粗大運動を通して友だちとの関わりや遊びを考えたい。そのためにも、日々の実践記録を蓄積し、家庭との連携も強め、わずかな変容も見逃さないように努めたいと思う。